

**目的** 恒体温の維持は体熱の産生と放散の平衡で成り立つ。着衣は放熱面の調節にあずかり、この方面の研究は多いが、衣服の産熱面への影響に関する報告は比較的少ない。そこで、着衣量の異なる二種類の服装を設定して、それぞれ、気温別に産熱量を測定し、着衣量が人体の産熱量に及ぼす影響についてしらべた。

**方法** 健康な本学学生 4名を被験者として日常生活において、春秋に、普通に見受けられる薄着の服装（ポリエステル製の長袖ブラウス・毛の膝丈タイトスカート・パンスト・パンプス）と、これに毛の長袖ジャケット・婦人用肌着の加わった厚着の服装について実験を行なった。産熱量の測定は、人工気候室で、薄着の場合は気温23℃、25℃、28℃、33℃に、厚着の場合は気温20℃、23℃、25℃、28℃（気湿はいずれも約60%）に設定し、椅座安静30分後と60分後に呼気分析して行なった。

**結果** 厚着と薄着とを比較すると、産熱量は全ての測定において、厚着の服装の場合の方が少なかった。二種類の服装について産熱量の経時変化をみると薄着では、25℃と28℃、厚着では 23℃、25℃の場合に変化が少なく、温度感覚の申告は快適であった。この時の産熱量は $38\text{kcal}/\text{m}^2/\text{hr}$ 内外であった。これ以外の気温では、何れの服装も産熱量の経時変化が大きく、温度感覚も暑い、もしくは寒いと申告した。従って、薄着では25℃-28℃、厚着では 23℃- 25℃が快適で、快適時には、産熱量の変化が少ないと考えられる。